



Title	月刊DRF 第82号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合
Issue Date	2016-11-07
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/73649">http://hdl.handle.net/2115/73649</a>
Type	periodical
Note	事務局: 北海道大学附属図書館; <a href="http://drf.lib.hokudai.ac.jp/">http://drf.lib.hokudai.ac.jp/</a> で公開したもの
File Information	DRFmonthly_82.pdf



[Instructions for use](#)



# 月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

## 第 82 号

No.82 November, 2016

- 【特 集 1】オープンアクセスウィーク 2016
- 【レポート】第2回 SPARC Japan セミナー2016 (オープンアクセス・サミット2016)
- 【レポート】富山大学附属図書館「オープンサイエンスと大学図書館の国際的課題－次期デジタルリポジトリをめぐる図書館コミュニティの役割－」
- 【特 集 2】研究データ活用協議会第1回研究会
- 【連 載】かたつむりとオープンアクセスの日常 第20回

2016年10月24日～30日は、国際オープンアクセスウィークでした。  
 記念すべき10回目となる今回のテーマは、“Open in Action”（行動が生むオープン）です。  
 期間中に、各地で行われた取組みの一部をご紹介します。



▲静岡大学附属図書館



富山大学附属図書館



▲東京歯科大学図書館



▲奈良女子大学学術情報センター



▲筑波大学附属図書館



▲北海道大学附属図書館



▲法政大学図書館

全ての写真はこちら→[https://www.flickr.com/photos/DRF\\_museum/sets/72157671426519323](https://www.flickr.com/photos/DRF_museum/sets/72157671426519323) (Flickr)  
 OAW2016→<http://DRF.lib.hokudai.ac.jp/DRF/index.php?oaw2016> (DRF wiki)

# 第2回 SPARC Japan セミナー2016 (オープンアクセス・サミット2016)

全国各地でオープンアクセス・ウィークが盛り上がっている中、10月26日（水）に第2回 SPARC Japan セミナー2016（オープンアクセス・サミット2016）「研究データオープン化推進に向けて：インセンティブとデータマネジメント」が開催されました。オープンサイエンスを実際に進めるためにはどうすればよいか、各ステークホルダーからの事例報告を踏まえて議論しました。

## 1. 医学生物学分野におけるデータのオープン化とそのインセンティブ

仲里 猛留 氏

（情報・システム研究機構

ライフサイエンス統合データベースセンター）

生命科学系データベース管理者の立場から、バイオインフォマティクス分野でのデータ共有・利用の実状が紹介されました。生命科学分野では従来からPubMedやBLASTなどによりDNA配列などのデータ共有が盛んに行われています。研究者は毎日大量のデータを扱っているため、それらを適切に管理する人がいることが望ましいと指摘がありました。

## 2. 日本古写真画像データのオープン化と大学図書館の役割

下田 研一 氏（長崎大学附属図書館）

長崎大学での古写真画像データのオープン化について紹介されました。古写真は付与されたメタデータがファイル名程度であり、同一撮影地の同一主題を撮影したものなどは詳細なメタデータの付与が問題でした。長崎大学で公開した3つの画像データベースは研究者や学芸員に解説の付与を依頼しており、図書館員と研究者、学芸員それぞれの特性を活かして作業を棲み分けるとよいのでは、との指摘がなされました。

## 3. 超高層大気観測データのメタデータ作成実験経過報告

南山 泰之 氏（国立極地研究所）

研究者と図書館の協働でデータベースを運用する実験の経過報告がありました。複数機関で運用する観測データベースIUGONETが研究者個人レベルの維持管理に依存していることに対し、図書館が既存の知識やノウハウを用いて解決策をどこまで提供できるか探る試みです。

段階を設定して実験を行っており、現在はデータに対して既存の情報を参考にしながらメタデータを付与する段階までは成功しているとのこと。データの扱いは研究内容や研究方法によって異なるため標準化が難しく、個別の取り組みを積み重ねるしかないとの指摘が印象に残りました。

## 4. 研究データマネジメントと日本の大学

青木 学聡 氏（京都大学情報環境機構）

大学としての研究データ管理システムを運用する立場から、現在のオープンサイエンス思潮の概観と京都大学における取り組みについて紹介されました。「研究デー



Photo by NII

タ管理」については「研究公正とコンプライアンス」、「オープン（データ）サイエンス促進」、「学術領域の発展と社会貢献」のためという複数の視点があり、それぞれ様々なレベルのコミュニティで実現されつつあります。これを大学規模に落とし込むと、リポジトリは公開レベル別に2〜3個必要ではないかとのアイデアが新鮮でした。

## 5. 研究データ利活用に関する国内活動及び国際動向について

武田 英明 氏

（研究データ利活用協議会／国立情報学研究所）

オープンサイエンスの潮流について概観し、今後について提言がなされました。オープンサイエンスのゴールは科学のプロセス全てがオープンになることですが、そのための一段階として、当面はデータの生成から公開、保存といったライフサイクルを通じてどのようにサポートするかが課題です。方向性としては「FAIRの法則」がコンセンサスになりつつありますが、どのように実施するかについては研究者だけでなく、図書館や企業などの様々なステークホルダーが共に考えていく必要があるとまとめられました。

## 6. パネルディスカッション：インセンティブとデータマネジメントの今後のあり方

蔵川圭氏（国立情報学研究所）をモデレーターとして、研究者と図書館が協働してオープンサイエンスを進めていくためにはどうすればよいかについて、時折司会者である能勢正仁氏（京都大学大学院理学研究科）も交えながら活発な議論が交わされました。研究者にとっては、図書館がオープンアクセスに力をいれていることはまだ浸透していないため、お互いの役割を認識し合うことがまずは必要だということです。その際、図書館の資源は限られるため、スキルを持つ専門職員による体制づくりが欠かせないだろうという重要な指摘もありました。

武田先生の「研究者へのインセンティブは既に出尽くしている」というご意見が印象に残りました。これまでオープン化によるメリットを中心に考えてきましたが、逆に省力化をお手伝いする方向も重要だと強く感じるセミナーでした。

松本 侑子（東京大学附属図書館）

## 富山大学附属図書館

## 「オープンサイエンスと大学図書館の国際的課題

## - 次期デジタルリポジトリをめぐる図書館コミュニティの役割 -」

10月28日（金）、富山大学にて国際オープンアクセスウィークにちなんだワークショップが開催されました。今年度のテーマは“Open in Action”ということで、オープンサイエンス時代のリポジトリの“行動（Action）”課題を国際的なコミュニティ活動の視点から探るものとなりました。以下、プログラムの順に沿って概要を報告します。

## 次期デジタルリポジトリシステムに向けたCOARの活動と日本の役割

山地 一禎 氏（国立情報学研究所 准教授）

オープンサイエンス（論文に加え、研究データもオープンにして、研究の公正性・成果の再利用性を高めようとする、新しいサイエンスの進め方）に係る研究データの管理について、海外の事例（COAR WG）及び国内の動き・NIIのシステム構築状況について話されました。海外ではすでにポリシーの制定・DMP（データ管理計画）の義務化など日本に比べかなり先行しています。しかし日本は、機関リポジトリに見られるように、方向性が決まれば国内共通の基盤を一気に整備していくところがあるので、短時間で普及させることができるのでは、とのことでした。

## 京都大学OAポリシーその後

鈴木 秀樹 氏（京都大学附属図書館 学術支援課長）

京都大学は2015年4月に、所属教員が執筆した学術論文等の研究成果をリポジトリKURENAIによってインターネットで原則公開することを決めました。報告ではオープンアクセス（OA）方針採択までの道のりと実装に向けてのマニュアル・システム整備・教員への説明会の実施（難色を示す教員がいる）について話されました。今後の課題として、教員・学生へのOAの理解促進、図書館職員のOA支援の意識向上等を上げられました。



## これからの機関リポジトリコミュニティ

鈴木 雅子 氏（静岡大学学術情報部図書館 情報課長）

2016年7月27日設立のオープンアクセスリポジトリ推進協会（JPCOAR）について説明がありました。JPCOARは機関リポジトリの新しいコミュニティとして、すでに存在する“デジタルリポジトリ連合（DRF）”、“機関リポジトリ推進委員会（IRPC）”、“JAIRO Cloudコミュニティ”の一元化を目指しているとのこと。人材育成・リポジトリの機能開発・情報交換の場として活動していきたいとのことですが、人手不足のため、皆さんの積極的な参加を期待しているそうです。

## ディスカッション：オープンサイエンスに向けた大学図書館コミュニティの役割

内島 秀樹 氏（富山大学 学術情報部長）の司会により、議論が行われました。大学の中ではOA及びオープンサイエンスについての認知度はまだまだ低く、内閣府の報告書や総合科学技術・イノベーション会議で取り上げられてはいるものの、世間に浸透させるにはより一層の努力が必要であると指摘されました。データリポジトリについては、今後どう進めていくか・何を規定するか・図書館は何ができるか・メタデータの記述方式はどのようにするか、など検討すべきことは山積みであると語られました。また、国内の学協会論文やテクニカルレポート・人社系の論文等は、電子化が進んでいない領域なので、各図書館は自大学が発行元となっている学協会へアプローチをするなどしてはどうかとの提案がありました。

このワークショップの中で心に残ったのが、「日本のリポジトリは紀要ポータルとしての色が濃いのが、それは特色であり誇れることである」との言葉でした。リポジトリに関してだけでもOAの充実・オープンサイエンスの実現と、図書館でやれるべきことは数多くあり、まだまだ未来は明るいと感じました。

谷口 今日子（富山大学附属図書館）

オープンアクセスウィーク中のイベントレポートをお届けしました！それぞれの資料は次のページで公開（または公開予定）のようです。ぜひご覧ください。

■第2回 SPARC Japan セミナー2016

<http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2016/20161026.html>

■オープンサイエンスと大学図書館の国際的課題

[https://toyama.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_opensearch&index\\_id=1427](https://toyama.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1427)（富山大学学術リポジトリToRepo）

# 報告会「研究データ共有 によるイノベーションの創出」

-第8回RDA総会等の国際議論を踏まえて-

国立極地研究所情報図書室  
南山 泰之

平成28年10月3日、研究データ利活用協議会（以下、協議会）の第1回研究会が国立国会図書館東京本館で開催されました。第8回研究データ同盟（RDA）総会（9月15日～17日、米国デンバー）の議論のみならず、同時期にデンバーで開催された研究データ関係の諸会議（SciDataCon：9月11日～13日、International Data Forum：9月14日）での議論も踏まえて展開された最新の動向紹介、ディスカッションをレポートします。

## 講演「RDAの概要とJaLC研究データ利活用協議会について」

国立情報学研究所教授、  
協議会会長

武田英明 氏

協議会会長である武田氏からは、協議会立ち上げの背景及びRDAの概要説明がありました。協議会では、2014年～2015年にかけて行われた「[研究データへのDOI登録実験プロジェクト](#)」を受け、データの活用を考える実務者レベルの横の繋がりを作るとともに、RDAに対して日本からどのように貢献するか、も考えていきたいとのこと。RDAの概要については[本誌2016年4月号](#)にまとまっていますので、そちらをご参照ください。



## 講演「オープンサイエンスを巡る世界の最新動向」

情報通信研究機構

統合ビッグデータ研究センター研究統括、  
協議会副会長

村山泰啓 氏

副会長である村山氏からは、[International Data Week](#)（9月11日～17日）の概要、海外の政策的な動きのほか、デジタル基盤を活用した今後のサイエンスの展望といった話題提供がありました。今回のInternational Data Weekには870人程度が参加しており、日本人参加者数は約34名、アメリカ、イギリス、ドイツに続き第4位とのこと。近年の傾向として、Google、FacebookといったIT企業がスポンサーとして名を連ねており、デジタルサイエンスが今後の研究プロセス構築において重要な役割を果たすであろうことが伺えること、海外でデータ管理・共有の話が政策的に進んでいる背景には、学会や専門家集団が「政策の場でこういった議題が議論されるべきだ」といった意見をきちんと提出してきていること、が示されました。



講演資料は以下で公開されておぞ！  
[http://www.ndl.go.jp/jp/event/  
events/201610rda.html](http://www.ndl.go.jp/jp/event/events/201610rda.html)  
こちらも要チェックじゃ！



## 第8回RDA総会参加報告

国立情報学研究所特任准教授 蔵川圭 氏  
 国立情報学研究所助教 込山悠介 氏  
 科学技術振興機構知識基盤情報部長 小賀坂康志 氏  
 物質・材料研究機構技術開発・共用部門  
 科学情報プラットフォームエンジニア 田辺浩介 氏  
 国立国会図書館電子情報部  
 電子情報企画課 山口聡 氏

続いて、今回のメインである第8回RDA総会の参加報告が計5名の方からなされました。RDAで展開される議論の場（BoF、IG、WG）は非常に多岐にわたるため、今回は参加者間で事前に参加予定のディスカッションを共有し、できるだけ多くの議論に参加できるよう調整したとのことでした。1) 蔵川氏からは、研究データのインターネット公開の在り方や、検索、保存、引用の構造に対する問題意識のもと、主にSustainabilityに関わる議論に参加した所感が報告されました。2) 込山氏からは、研究データ管理のためのリポジトリ技術やメタデータ互換性、仮想研究環境構築のための情報収集を軸に、技術面での実装という観点からの参加報告がありました。3) 小賀坂氏からは、助成機関によるオープンサイエンスポリシー策定やプラットフォーム構築を念頭に置き、新たなfunding modelを検討するための情報収集、という視点からの所感が報告されました。4) 田辺氏からは、a) 研究支援職、及びb) エンジニアとしての2つの立ち位置から、a') 自機関の専門分野（材料科学）に属する議論、及びb') データの信頼性の担保に関する議論に参加した際の所感が報告されました。5) 山口氏からは、第4期NDL科学技術情報整備基本計画への対応を中心に、ナショナルレベルでのデータサービスに関する議論への参加報告がありました。

## Digital Infrastructures for Research 2016 in Krakow報告

国立情報学研究所准教授 山地一禎 氏  
 国立情報学研究所准教授 船守美穂 氏

引き続き、関連する話題提供として標記の報告が山地氏、船守氏よりなされました。ヨーロッパにおけるクラウド



環境を議論する場である本会議では、あらゆる研究コミュニティにデジタル技術がゆきわたらないとヨーロッパの研究競争力は向上しない、という問題意識のもと、巨額の資金を投じつつ、デジタル基盤に対する知識、スキルが欠落しているコミュニティをどう促していくか、という点に議論の焦点が当てられていた、とのことでした。

## 講演「RDA総会他から見える研究データ共有の現状と国の科学技術・学術政策への示唆」

文部科学省科学技術・学術政策研究所  
 科学技術予測センター上席研究官 林和弘 氏

講演パートの最後として、林氏から標記の講演がありました。内容をやや乱暴にまとめると、まず「必要なところでしか研究データ共有・オープンサイエンスは進まない」ことを前提にしつつも、Open by Default時代を目指すための様々な課題（研究データのオープン / クローズ戦略、ビジネスモデル、データの質保証、コミュニティのコンセンサス等）を指摘されました。さらに、オープンサイエンス推進による研究活動スタイルの変革、それを支えるグローバルな研究データ利用基盤の構築といった潮流に対して、日本はRDA等の場を通してどのように国際社会に貢献していくか、を示唆されました。「西洋科学の輸入と改善ではなく、次世代科学の創出に携わる世紀のチャンスを楽しもう」というメッセージが印象的でした。

## フロアも交えたディスカッション

ディスカッションは、まずフロアから寄せられた事前質問に対し登壇者が回答していく形式で進められました。RDAに行政や機関のトップが参加する必要性、といった政策的なものから、データリポジトリへの適切な課金例、といった極めて実務的なものもあり、幅広い層からの関心が窺えます。

個別質問の後には、「研究データ共有によって本当にイノベーションは進むのか？」というテーマで、登壇者を中心にディスカッションが進められました。「既存の研究で使っている統計的な手法に留まらず、ドメインの研究者とデータサイエンティストが協働して初めて実現できるようなものがイノベーションと言える」とは蔵川氏の言ですが、左記にある程度の共通理解としつつ、データを介した研究分野間の繋がりはどのように進むのか、あるいは研究者以外との協働（ライブラリアン等）はどうか実現できるのか、といった論点につき、多様な意見交換がなされました。「オープンサイエンス」時代の図書館員は研究者とどのような協働ができるのか、これからの展開が楽しみです。



10月14日から18日にかけて、コペンハーゲンで開催されたASIS&Tの年次大会に参加してきました。ASIS&Tと言ったらアメリカ情報科学技術協会のはずなのになぜデンマークで開催…と思ったら、数年前から略称はそのままに Association for Information Science and Technologyと「アメリカ」を取った形に改名していたのでした。

参加の主目的は「図書の表紙とタイトル・著者名のフォントが人の注視・図書選択に与える影響」に関するポスター発表[1]をすることで、オープンアクセスとは全然関係がなかったのですが（ちなみに、表紙の色やタイトルのフォントが本を選ぶ時に見つめる時間と関係するか、という研究で、結論としては色は関係なく、フォントは明朝体よりゴシック体の方がよく見られていました）、計量書誌学等を扱うSIG/METRICSのワークショップに参加したり、オープンピアレビューに関するパネルを聞いてきたりと、OA関係の話も見聞きしてきました。

OA関係で特に面白いな、と思ったうちの一つは、SIG/METRICSでポスター発表されていた、東京大学の横井慶子さんの研究“The sustainability of Open Access journals : The situation regarding Open Access journals launched between 2000 and 2014”[2]です。OA雑誌といえば持続可能性に問題があると指摘されることがしばしばで、ビジネスとして成立するのかどうか、初期には多くの疑問が呈されてきました。今では多くの商業出版者もOA雑誌を展開しており、その結果がビジネスモデルが成立することを示しているとも考えられますが、しかし実際のところOA雑誌の持続可能性はどれくらいのものなのか、そして購読型雑誌に比べて低いのか、高いのか…というのを調べたのが、横井さんの研究です。2000年から2014年に創刊した雑誌について、雑誌のデータベースUlrichswebやDOAJの情報から、OA状況や創刊・廃刊情報を調査・分析しているのですが、結論として、ほとんどの年において購読型雑誌の方がOA雑誌よりも持続可能性が低い、つまり、廃刊している雑誌が多いことがわかったそうです。例外は2011～2012年頃で、この時期にはHindawiとBenthamのOA雑誌大手2社が大量に創刊したシリーズがかなり廃刊しているとのこと。短時間で大量に雑誌を刊行するOA雑誌出版者は見切りも早いと考えられますが、コツコツやっているところについては、ちゃんと続いている雑誌が多いようです。ちなみにその例外的な時期を除けば、OA雑誌の廃刊率はだいたいいずれの年に創刊されたものも5%を下回るくらい、購読型雑誌

は10年以上前に創刊の雑誌は10%前後、それ以降に創刊のものは（最近創刊なので当然ですが）どんどん低くなる、という傾向で、購読型雑誌も10年続けば、それ以降はあまり廃刊しないとは言えそうです。今後一層の精緻化をされていくとのことですが、この結果だけからでも、OA雑誌の持続可能性に文句をつけられたらすかさず「いや、購読型雑誌だって持続可能性はたかがしれている」と言い返す材料になりますね。

ちなみにSIG/METRICSではその他にOA関係として、フィンランドの論文を対象に、OA雑誌掲載かどうかとaltmetricsの関係を調べた研究発表もなされていました[3]。ただ、結論としては関係あったりなかったりあっても逆だったり（人文社会系ではOA論文はTwitterからの言及は多いがMendeley登録は少ない、とか）とまだはっきり有利／不利を言えそうな結果ではありませんでした。

また、ASIS&T全体会でポスター発表をされた鶴見大学の角田裕之先生たちのグループは、機関リポジトリに収録されたコンテンツ数と各種の大学ランキングの関係を分析する、という、これも興味深い研究をされています[4]。今のところはっきりと相関が出ることはなく、それゆえむしろリポジトリのコンテンツ数が新たな評価指標になるのではということです。

[1]<https://www.asist.org/files/meetings/am16/proceedings/submissions/posters/20poster.pdf>

[2][https://www.asist.org/SIG/SIGMET/wp-content/uploads/2016/10/sigmat2016\\_paper\\_4.pdf](https://www.asist.org/SIG/SIGMET/wp-content/uploads/2016/10/sigmat2016_paper_4.pdf)

[3][https://www.asist.org/SIG/SIGMET/wp-content/uploads/2016/10/sigmat2016\\_paper\\_2.pdf](https://www.asist.org/SIG/SIGMET/wp-content/uploads/2016/10/sigmat2016_paper_2.pdf)

[4]<https://www.asist.org/files/meetings/am16/proceedings/submissions/posters/4poster.pdf>

佐藤 翔

同志社大学免許資格課程センター助教。

ブログ「かたつむりは電子図書館の夢をみるか」(<http://d.hatena.ne.jp/min2-fly/>) 管理人。



【レポート1】図書館総合展IR・OA関連フォーラム

■ 次号予告 ■

【レポート2】北海道大学「国内外のオープンサイエンスに関する動向と展望」

【連載】今そこにあるオープンアクセス第21回

